

## 第4回 恒久平和に貢献する万国津梁会議 会議録概要

日付：2025年（令和7年）9月10日（水）

会場：沖縄県庁6階 第2特別会議室

### 秋山道宏 委員

#### はじめに

- 「はじめに」もしくは、この提言書自体がどういうものなのかははっきりと打ち出す中でこの平和の懸け橋というメッセージを早い段階で伝える方がよい。提言書の全文を読む人は多くないと思うため、ダイジェスト的にぱっとメッセージを伝え、そして、そのメッセージの前提としてこういう歴史があるのだとクリアに示せる形がいいと思った。

#### 2章 将来像における「平和」の捉え方

- 中国や北朝鮮の動向以外も丁寧に2章に書き込んでいただいている。こういった状況の中で中国や北朝鮮にダイレクトにアプローチすることはなかなか書きにくいと思うが、全方位的なネットワーク作りのようなことが前回の会議で議論されていたと思うが、このネットワークがNATOやアメリカなどの軍事同盟中心のものとは違うという打ち出しは重要だろう。その際に、グローバルサウスという言葉を使うかどうかは判断が難しいが、全方位的なネットワーク作りに非軍事的なアプローチを結び付けた方がよりクリアになると思う。

#### 3章 恒久平和に貢献するための将来像

- 私もその方向性（畠山委員による「はじめに」にメッセージを記述しては、という提案）は重要な一案だと思う。一方で、メッセージを打ち出す現状や歴史は踏まえつつも、この提言書自体がどういうものなのかを提言書のもう少し早い段階で示してよい。

#### 5章 将来像の実現に向けた推進体制

- 33ページにおける平和研究機構に関する記述で、市町村における蓄積について触れられてはいるが、市町村史の編さんは従事者の雇用が不安定な中で長く取り組まれているので、これまでの蓄積を踏まえると同時に何らかのサポートも必要だと思っている。

- 研究機構は、研究活動だけではなく、長委員が述べられたダークツーリズムなどの普及活動と奨学金や研究奨励金を組み合わせることで、研究者、学芸員、アーキビストの後継者育成もできるのではないかな。
- 山根委員の意見も踏まえて、研究テーマの最後の段落はかなり具体的な記述になっている。水爆実験などの具体例は残しつつもこれまで解明されてこなかった歴史的な事実や事象についても積極的に取り組む、というふうに水爆実験の影響という具体的事例は括弧で例として取り上げ、研究テーマを少し広めにとり、これまでにあまり扱われてこなかったテーマも積極的に取り上げるというまとめ方をしてはどうか。
- （沖縄県と大学の連携について）私は大学の代表ではないが、沖縄国際大学でテーマ的に近いのは南東文化研究所である。同研究所は平和学にかかわるようなテーマも扱っている。平和研究所については元々議論がそこまで活発ではない。大学内に平和学のゼミや沖縄戦や平和学関係の授業もあるため、大学独自で研究所を作るという可能性もあったがそれが難しい中で、県が研究所を独自に作るよりは、いろんなところとネットワーキングして協力することはできると思う。
- 琉球大学だと島嶼地域科学研究所の中では移民研究なども活発であり、大学全体というよりも研究所や既に研究活動をしているところと連携をとるやり方が特に大学場合にはいいのではないかな。

#### 文章全体について

- 貧困・暴力については、特に沖縄の軍事基地と絡めると外すことができない。どう掲載するかは議論が必要だが、掲載を検討した方がいいのではないかなと思う。

#### 万国津梁という言葉

- 北上田委員からも発言あったが、万国津梁という言葉はおそらく近年主張され、改めて価値づけがされていると思う。ヌチドゥタカラという言葉も証言に出てくるが、70年代後半～80年代ごろに教科書問題やいわゆる33回忌があり、沖縄戦体験をどう残すのかという議論の中でより強調され、今のような教訓になってきたと言われている。
- 歴史的に沖縄とアジアの関係は信頼関係だけではない。北上田委員が指摘した万国津梁という言葉に対する意見は、植民地主義の議論があまり触れられていないところも関係すると思う。
- 万国津梁という言葉は、全方位的な外交や地域外交の中で触れられていると思うが、植民地主義の問題が触れられていないからこそ、残念ながら万国津梁のポジティブな面だけが前面に出てしまっていると考えた。

- ある種、植民地主義の継続のようなものがイスラエルとハマスの紛争に関連しており、植民地主義の文脈を入れるのであれば表現を変えていかないといけない。紛争という言葉を使った表記の議論もそうだが、虐殺や民族浄化という言い方やそこまで踏み込むかどうかは別として、イスラエルとハマスの紛争という言い方や捉え方は少し議論をしたほうがいい。

## 最後のコメント

- 提言書の全てを読んでももらえなくとも、こういうコンセプトで進めていくことを、より多くの沖縄の人、沖縄に関心がある人、もしくは沖縄との関わりや、ルーツがある人に広がっていくためにどの様に使っていくかということが、提言書の意味合いだと思う。実際に使っていく1人として、ぜひ今後とも関わらせていただければと思っている。

## 長 由紀枝 委員

### はじめに

- はじめにを単なる紹介にしてしまうのはもったいない。ほとんど要約に近い形にできているので、言い方や順番を変えれば、この提言書を要約した形になる。映画の予告編のように、要約を見た人が絶対に読んでみたいと思うものがあればいい。
- 比嘉委員から指摘があった戦争・紛争の語句について、4ページの13行目～20行目について提案だが、16行目の「方法で、」以降から17行目の「戦争は」までを削除するとすんなり繋がるのではないか。

### 3章 恒久平和に貢献するための将来像

- メッセージについては、北上田副委員長長の発言にあったように記載する場所がどこなのかは、どの程度目立たせたいのかによると思った。提言書の全てを読む人は研究者やこういう分野に興味を持たれている方が大半で、どんなにいい内容であっても、場所によっては隠れてしまってスルーされてしまう場合もあるので、目立つ場所はどこなのかと考えている。

### 4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

- 4章の19ページ31行目に、国際的な都市間のネットワークで中国の都市との連携は重要であると記述がある。全く異論はないが、その中で南京市が出てきていて、

南京との連携も全く異論はないが、南京だけが出てきているので、なぜ南京なのかと聞かれた際にきちんと説明ができればいいと思った。

- その前の段落（19 ページ 28～30 行目）にすごく大事なことが書いてある。被害を受けたと同時に、加害者の一員としての立場もあると触れられている。雑談であるが、私が大学院時代に広島・長崎再考という授業を受けていたときに担当の先生が広島の方と一緒に重慶に行ったことを話していた。広島の被爆者の方たちはご自身の被曝のことを語る一方で、重慶爆撃のことを一切知らなかったので重慶の人がただただびっくりしていたというようなお話があった。何かそういう双方向性というか、そういうことがここに反映されているとわかった。

## 5 章 将来像の実現に向けた推進体制

- （研究機構の研究テーマにあるグローバルとローカルに関する事務局の説明を聞いて）いい答えだと思った。例えば、広島平和研究所であれば核という明確なものがあり、沖縄の場合は何になるのかというときに、単に平和研究所ということだけでは、ぼやっとしたものになると思うので、回答いただいたようにローカルとグローバル、その両方に貢献するというのはすごく説得力があると思った。
- （県内の平和関連施設ネットワーク構築事業について）1 回目の会議にて、インバウンドの方々も沖縄県平和祈念資料館を訪れるが、西洋からの来館者が多く、アジア・中国の方は少ない印象がある、という話があったと記憶している。せっかく沖縄県は中国とも連携しようとしているので、アジアの方々にもこの 8 つの館を巡ってもらえるような取り組みを平和研究機構とコラボしてできないかと思った。
- 研究所あるいは研究機構というのはシンポジウムをしたり、ペーパーを出したりするが、一般の旅行者にとっては距離が遠い取り組みのような気がする。一般の方が訪れるのは恐らく、8 つの施設の方だと思うので、それらと研究機構が何らかのいい形でコラボできるといいかなと思う。
- （研究機構の資金調達の手段として）ふるさと納税を通じて平和研究機構を支援できる仕組みがあればやってみたい。新たにファンドを作る場合、沖縄平和賞の募金と競合しないのかは気になるところ。

## 人間の安全保障

- 人間の安全保障に関係する記述が、はじめに、2 章、3 章にある。はじめにでは 3 ページの 16～17 行目で、人間の安全保障は恐怖からの自由、欠乏からの自由とだけ書かれており、尊厳とともに生きる自由が抜けてしまっている。2 章の 10 ページの 29 行目では「尊厳をもって幸福に生きることができる」と記述があるが、3 章 12 ページの 19 行目は「主に」という言葉が入っているが、絶望と恐怖に関する

記述で終わっているのに、尊厳とともに生きる自由を常にセットに入れていただきたい。

## 最後のコメント

- 委員にさせていただいて本当に感謝している。本当にたくさんの方々のことを委員の方々、県庁の皆様から学んだ。沖縄へのフライトは今日も満席だった。沖縄のイメージは観光地である。観光で来沖される方たちは基地問題をなかったことにしているというか、それは多くの本州の人間がそうであり、そこを何か繋ぐ役割がこの委員会や、その成果物を通じて何かできればいいなと思う。

## 北上田源 委員

### 3章 恒久平和に貢献するための将来像

- メッセージとして軍隊の否定や、あるいは非軍事ということを入れたいという思いはある。
- 2章、3章で基地問題や戦後の占領下における米軍の人権抑圧などの話もすでに記載されている。メッセージにある記憶の懸け橋の話の中には沖縄戦の話しか書かれていないため、そこに2章、3章にあるいわゆる米軍による統治などの記憶を継承していく、という言葉が入る方が全体としてバランスがいいのではないかな。はじめに、2章、3章にも基地の話が入っているので打ち出すメッセージでも、いわゆる軍隊の問題や基地の問題に触れることができないかと思っている。
- 恒久平和に貢献する方策のイメージ図は案2がよい。

### 4章 将来像の実現に向けた基本的な方策

- 18ページの短期施策内の小中高における平和学習の充実について、細かい話をするときりがないが、今書かれている文章には多様なレベルの話が混ざっている。16行目から、課題として平和教育が6月に集中することや経験の浅い教員が担当になることが書かれているが、これらは課題というよりは、課題がなぜ解決されにくいのかという要因である。おそらく、課題としては一般的に言えることだが、戦争体験者が少なくなっていて、教材が不足しており、そして教職員の時間がないなどである。このような課題と要因を踏まえてどうすればいいのかといえば、カリキュラムなのだという話である。

- 比嘉委員の意見にもあった多文化理解や共生についての学習とこの話は異なる話ではなく、学習内容を体系化していくという話なので、その部分をもう少し整理したい。
- 22 ページの戦争遺跡群の保存活用について、4～5 行目に戦争遺跡を将来的には世界遺産に登録することを見据え、と書かれている。おそらく、知事の発言にもとづいていると思うが、戦争遺跡の保存活用に関わる議論を実際に現場でしている身からするとあまりにもかけ離れすぎている印象がある。世界遺産を将来的に目指していくとしても、まずは少なくとも文化財指定だと思う。戦争遺跡で県の文化財指定されているものは沖縄県内では 32 軍司令部壕の 1 つだけだと思う。世界遺産という話がこの文脈の中でいきなり現れた印象を受けており、世界遺産までの間を埋めるような何かが見えたいと思った。

## 5 章 将来像の実現に向けた推進体制

- 5 章で書かれたことが実現できれば、平和に関連する仕事をしたいと思っている方々の大きな励みになると思う。個々の博物館や市町村史の編さんに関わっている学芸員の方が雇用形態も含めて安定していない。やむを得ないところもあるが、主体は違うもののネットワークになっている 8 館の後押しや、平和祈念資料館の体制強化、平和研究機構という話が出てくることになれば彼らにとって励みになると思った。現場で苦労しながら積み重ねをされてきた方々がいたから今の沖縄の沖縄戦とか平和に関する研究が成り立っている部分があると思う。ぜひ人件費も含めて予算を確保してほしい。そうなれば、これまでの蓄積で沖縄の平和研究を進めるだけでなく、今後の発展を見越しても重要な部分になってくると思うので、ぜひとも積極的に進めていただきたい。
- （沖縄県と大学の連携について）大学との連携については、私は琉大の代表ではないし、私は教育学部所属なので教育学部以外のことはわからないが、教育学部は教育委員会との連携を含めて色々あると思う。その他の学部については把握していないからこそ、研究機構というに期待したいというか、希望を見出したいと思っている。

## 万国津梁という言葉

- 万国津梁という言葉はわかりやすいが、恣意的な印象を受けることもある。あまり知られていない極端な話だが太平洋戦争のときに、実は万国津梁が日本軍の八紘一宇の大東亜戦争の絡みで使われていた歴史もあるので、万国津梁の精神が強調されすぎている印象を少し感じてしまう。
- 歴史の中で沖縄の人がアジアの人たちと常に仲良くしてきたかっていうとそうでもない。沖縄は日本の一つの県としてアジア侵略にも加担した部分があることは間違

いない事実だと思うので、言葉の定義にこだわるわけではないが、万国津梁の意味や背景を理解したうえで使うほうがいい。

## 最後のコメント

- この会議の最初に自己紹介でも話したが、私はこれまで研究対象として、あるいは私の経歴としてもかなり現場に足を運ぶ状況がある。平和学習の現場、授業をしている教室の現場、外国にルーツを持つ子供の現場、市民運動や平和に関する運動の現場など、やはり現場に立ってもがいてきたつもりである。世界の平和、アジア太平洋の平和、国際的なネットワークの文脈の中で、私には何ができるのかと感じていた。今振り返ってみるとやはり現場にいながらも視野を広げて色々な形で見ることができ、そういう経験をさせてもらったと思っている。

## 畠山 澄子 委員

### はじめに

- 4 ページ目で、やはり平和的手段で解決するのだ、という点を強調したかったことを盛り込んでいるのはありがたい。
- 北上田委員が述べたように、メッセージの部分だが3章で展開するのはいいとして、はじめにの一番最後をメッセージで終えてもいいかと思う。章立てを説明する中で懸け橋の説明があってもいいと思うが、最終的に沖縄県として世界の人々に向けたメッセージはこれなのだ、と印象づける形ではじめにを終えてもいいと思う。

### 3章 恒久平和に貢献するための将来像

- 13 ページの 21～23 行目で、「沖縄県は県民一丸となって」から始まるメッセージでは、提言書案全体を通してアジア太平洋地域の恒久平和という表現が増えている反面、世界の恒久平和という表現がなくなってしまった、もしくは印象が薄まった気がする。アジア太平洋地域の平和に貢献することに重きを置きつつ、しかしやはり世界の平和に貢献するのだ、という記述がどこかに一言入ってもいいのかなと思った。

### 5章 将来像の実現に向けた推進体制

- 33 ページの研究機構にかかる記述で、研究テーマに関する表現が全般的にわかりにくい印象を受けた。マクロな平和研究だけでなく、グローバルに共有できるものとはつまり何を意味するのかわかりづらいかなと思ったので、表現を工夫できればと思っている。

- (事務局の回答を受けて)やはり地域特有の課題とか地域だからこその史料を生かしながら、それを研究テーマにしていくことで、国際平和や平和学の理論にも貢献できるといったフレーズになるといいのかなと思った。

## 最後のコメント

- 北上田委員が述べていた、沖縄戦の実相だけでなく、やはり戦後も含めて軍事中心主義は人間の安全保障を阻むという教訓である、という指摘がすごく大事だと思うのでどこかに入ることができればよい。
- 万国津梁というものを必ずしも手放しに賛美するだけでなく、冷戦構造や植民地主義などに翻弄されながら、それが必ずしも実現しないような構造の中に沖縄が置かれてきたことも入るといいのでは。
- ハマスに関する議論や紛争の話題も出てきたが、長く残る文書としては個別の事象を書き込むよりは、大国や主要国と呼ばれる元々は国際秩序を守っていく側にあったはずの国々が国際法を自ら破ったり、国際的なルールに則らないような動きを見せたりという状況に対して、そうではないと、対峙していくメッセージが伝わる何かなければいいのかなと考えていた。

## 比嘉 千穂 委員

### はじめに

- 3ページのはじめにと、7ページの恒久平和に貢献する意義の部分だが、沖縄の歴史を踏まえた記述があるが、世界のウチナアンチュとのネットワークに関連する部分をはじめにや、恒久平和に貢献する意義の部分で触れていただけたらさらに繋がりが見えていいと思っている。
- 沖縄移民は戦前戦後と色々とあるが、やはり移民先での差別にあったり、沖縄戦があったがために収容されたりと、沖縄戦と関係する部分もある。また、戦後には海外の方たちが様々な救援活動を行ってくれたこともあるので、そういった点も踏まえて、予告編とも言えるはじめにで触れていただけたらと思った。
- 4ページの6～7行目にあるイスラエルとハマスの紛争の長期化については前回の議論ではなかったかと思うが、紛争という語句でいいのか、戦争なのか武力衝突なのか、そういった語句の書き方が少し気になった。



- 8 ページの 22～23 行目でユイマールやチムググルなどを書いてあるが、私は詳しくはないがカタカナ表記で良いのか、もしくはひらがな表記がいいのか確認や補足を入れるほうがいいかもしれない。

### 3 章 恒久平和に貢献するための将来像

- 三つの機能、記憶の懸け橋、人の懸け橋、知の懸け橋はすごくわかりやすくなっていると感じた。

### 5 章 将来像の実現に向けた推進体制

- 研究テーマに関して、ローカルな視点とグローバルな視点の 2 軸で研究をすることはよいと思う。ローカルの研究の中でも沖縄県内だけではなく、沖縄から移民された方たちも色々な戦争体験をされているので、そういった方たちも含めた研究であるといいと思った。
- 31 ページの行政、民間団体・研究機関との連携について、これらに加えて県内の大学機関との連携はどうだろうか。

### 最後のコメント

- 自分の専門性から何か伝えられることがあるか考えながら今日まで会議に出席してきた。委員それぞれの専門知識を聞きながら、沖縄の被害性はすごく勉強してきたが、加害性もあるのだというところを私も改めて勉強し直した。
- 次の世代に対して私達は何ができるかなと考えた際に、たくさんの議論があるが、私のできることがあれば皆さんの力になれるように頑張りたい。

### 村田 俊一 委員長

### 3 章 恒久平和に貢献するための将来像

- はじめにをエグゼクティブ・サマリー (Executive Summary) のようにしてほしいという長委員の意見は理解できる。文章全部を読む方々が少ない中で、エグゼクティブ・サマリーを読んだ後にもっと読みたくなるように、はじめにをもう少し工夫するといいいのではないかな。
- 恒久平和に貢献する 3 つの懸け橋について、知の懸け橋で恒久平和の構築に必要な情報を収集し、新たな価値を生み、発信するとあるが、これは沖縄県民のオーナーシップであると理解している。我々が提言を出しはするものの、沖縄県民のオーナーシップをもってさらに価値観を醸成していくことを仮定していると私は思っている。

る。沖縄県民にその内容の周知を図っていくためには、色々なフォーラムが必要になってくるだろう。

- 研究者だけが理解するのではなく、県民の各層で理解していく必要がある。将来像の内容を構造的に咀嚼して、自分たちのオーナーシップを持って、県民としてのメッセージを発信するかというのは、非常に重要な課題になるのだと思う。

## 5章 将来像の実現に向けた推進体制

- 研究機構に必要な資金集めには大変な努力が必要だと理解しており、提言書案にも基金の創設と記述がある。スタートするための資金が必要になるのでそれはどういうやって、どこから持ってくるのか。
- （研究機構設立などの事業が進むことで）ステークホルダーといわれる重要な行為主体として、副委員長が述べていた若者はこういう事業を通して士気が向上するのではないかと私も思う。そういう意味では、学生や一般に言われる若者に対する奨学金やインターンシップのためのクラウドファンディングは励みになると思う。もちろん NGO にとっても非常に励みになるのではないかな。
- ファンドには種類があり、県が有する基金があるだろうし、民間セクターから募ったり、若者を対象にしたクラウドファンディングがあったりする。色々なタイプのファンディングをこれから考えて行くほうがいい。それぞれに用途も違うだろうし、一つにあまりにも集中するとファンド自体が疲弊していくので、なるべくリスクを分散しながら進めるのが大事だろう。ふるさと納税も選択肢の一つではないか。

## 万国津梁という言葉

- （北上田副委員長による万国津梁という言葉に対しての意見に対して）北上田副委員長の発言に関連して、提言書案には新たな価値感を生み、と書いてある。担う人たちが時代や世代は移り変わっていくので、私は新たな価値を生み、そして発信するということは、要は過去の万国津梁という価値感から今の万国津梁という価値への進化だと思っている。新しい価値観とは何なのかをこのドキュメント中のどこで示すと一番読み手に刺さるのか考えている。価値観の解釈は読者に任せるというよりも、ここで皆さんとどういった新しい価値観を創出して行くべきかもう少し議論してもいいと思う。
- 私は、過去にから開催されてきた万国津梁会議内における万国津梁の価値観やイメージや位置づけが、この会議を通してどう変わったかを説明できればいいと思う。人間の安全保障やSDGsという考え方は過去の万国津梁会議の中で扱われていなかった気がしている。また、若者という視点も具体的ではなかった。これまでの万国

津梁会議における万国津梁の定義が、この会議を通じてどう進化しているのだろうか。

### 最後のコメント

- 本州の方々は沖縄のことを他人事みたいに思うところがあり、私は本当にかっかりしているところもある。私の所属大学には沖縄から来ている学生もいることもあり、私が万国津梁会議に参加しているというキャンペーンをしている。この会議終わったあとでも、持続可能なネットワーキングと協力体制に努めていきたいと思った。
- 今日の議論は事務局と調整して、皆様に確認を取る意味で資料を送らせていただきたいと思いますと思っているので、もう少しだけお付き合いいただきたい。

### 本会議開催前の事前ミーティング

#### 文章全体について

- 他の万国津梁会議で例えばジェンダーや多様性などを扱っているかもしれないが、提言書案には軍事基地に関連する被害としての性暴力の問題への言及がどこにもなかったと思っている。
- 95年の少女暴行事件の以前から女性のネットワークは世界的に存在しており、95年以降はそのような性暴力による被害者のケアや地位協定などの制度の問題だけでなく、それ以外の関連することに対しても抗議をしたと思うので、その点は他の万国津梁会議で扱っていたとしても簡単にでも触れておいた方がいいのではないかな。

### 3章 恒久平和に貢献するための将来像

- 3章の人間の安全保障の説明で、恐怖からの自由にかかる説明について「暴力、人権の抑圧、戦争などからの自由を指し」とあるが、この暴力に性暴力が含まれているのか。広く言えば含まれているのだとしても、やはり今のガザで起きているような紛争に由来する暴力が浮かんでしまう。女性特有のものは明示的に出てきていないため、どこかに入れてもいいと思った。

### 5章 将来像の実現に向けた推進体制

- 研究機構 (Research Organization) とすることでやや広義な感じがある。研究所 (Research Institute) となると非常にフォーカしたイメージであり、今のところ私は研究機構の中に研究所が存在するのではないかなというぼんやりしたイメージを持っている。研究機構の設置に関する庁内調整は非常に時間もかかるし骨の折れ

ることであると思うが、提言書をもとに予算なり、人材なり設備なりを正当化して主張できればと思っている。

- 広義の暴力の中にはドメスティック・バイオレンス（DV）と言われる暴力も含まれるし、性に対する暴力も含まれる。それから最近は言葉の暴力も入っておりハラスメントと言われている。言葉の暴力が入るというのは非常に重要だと思っている。当然、ここには人権関連も入る。結論的にはそういうところもひっくるめて5章で少し付け加えることはできるだろう。